巻頭言

「有無の見を破る」ということ

仏教文化研究所所長
譲　西　賢

ある県の公立高校の入学式で、新一年生を担任する女性教諭が、自身の長男の高校の入学式に出席するために休暇届けを出して欠席したことが議論を呼んでいます。休暇の手続きには問題はなかったのですが、「担任する新一年生の入学式だから職責を優先すべきである」という意見と「手続きを踏んで、母親の役割を優先したことは尊重されるべきである」という意見が拮抗しているようです。教育委員会は、職責優先の立場で指導する態度を表明しているようですが、家庭と職業の両立にかかわる議論は、どちらかを優先するということでは、決着はむずかしいと思われます。

インドの龍樹大士は、『中論』において「有無の見を破る」ことについて説かれました。『中論』は、人間が自らの分別・計らいによって苦しみ、有無のどちらかに偏り迷うしかないことが説かれています。親鸞聖人は、このお諭しを正信偈に「悉能摧破有無見」と著されました。「ことごとく有無の見を摧破して」ということは、龍樹大士が「『有が正しい。いや無が正しい』と、人間が自己の分別によって計らうから、

偏り迷う」と摧破されて、中道実相のあり方を明らかにされたということです。

この高校の女性教諭の入学式の職場欠席をめぐる議論は、職責優先の立場と家庭優先の立場のどちらかに立って議論する限り、白黒はっきりさせることはできません。自己の分別こそが正しいとどちらの立場で論じたとしても、有無の見を破ることはできません。毎日、責任をもって学校で児童・生徒への教育を実践し、家庭にあっては良き父母の役割を果たしておられる方々にとっては、どちらも掛け替えのない生活の場であり、どちらか一方を選びとるのではなく、両者の中道をそっと歩いて行かれるしか道はないのです。

人間の分別を優先して正解を求めようとすることが、混乱と苦悩を深めることになりかねないことを知っていなければなりません。ありもしない正解を求めようとすることは、正解よりも自身の分別を強調したい本音に振り回されていることに気がつくべきではないでしょうか。

『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』第十四号をお届けします。ご執筆賜りました諸先生方に御礼申し上げますとともに、法義相続の念をもってご高覧賜る諸氏に衷心より御礼申し上げます。

二〇一四年四月三十日